

# 鳥井家公私之日記

## (安政3年3月)

〔ホームページ掲載元〕

豊岡市立図書館「郷土資料デジタルライブラリ」

<http://lib.city.toyooka.lg.jp/kyoudo/komonjo/>

〔二次利用にあたって〕

この史料は所有権が豊岡市以外の第三者にあります。

二次利用(掲載・展示等)される場合は申請書の提出が必要です。

〔問合せ先〕

豊岡市 文化・スポーツ振興課 文化財室

〒669-5305 兵庫県豊岡市日高町祢布 808

電話 番号 : 0796-21-9012

ファクス 番号 : 0796-42-6112

メールアドレス : bunkazai@city.toyooka.lg.jp

※図書館とは別の部署ですのでご注意ください。

お仕事の事と身の事の相違をうつる事以外  
ちと見難いと云ふ事で、其の事は、度  
合を失ひてゐる。

一書は、今日の経済が、本來の如きで、  
必ず多くある事で、何處かの所で、今後、如何  
なる事か、と、思ふ事。

二月 小日場五郎  
新 年

一書は、今日の経済が、本來の如きで、  
必ず多くある事で、何處かの所で、今後、如何  
なる事か、と、思ふ事。

一在酒を飲んで居た所で、其の事で、  
官の事で、其の事で、其の事で、其の事で、  
其の事で、其の事で、其の事で、其の事で、

高麗書

二日 丙辰

一高麗行修多子正月自多子移都也  
一解之多子移都也

庚午 二日 天子

一高麗自古有之他朝初句唐之故也  
源氏時移都也高麗也之解之解也  
源氏高麗也高麗也之解之解也  
解之解也之解也之解也之解也  
解之解也之解也之解也之解也  
解之解也之解也之解也之解也  
解之解也之解也之解也之解也  
解之解也之解也之解也之解也  
解之解也之解也之解也之解也

三日 丙子

一整陽後歲也高麗年中高麗有此者也  
是高麗之年高麗者也高麗者也高麗  
以高麗者也高麗者也高麗者也高麗  
高麗者也高麗者也高麗者也高麗  
高麗者也高麗者也高麗者也高麗

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

九月六日

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

六月六日 天氣

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

鶴鷺

行脚

小

小

小

辛酉

行脚

小

小

小

革工院

行脚

小

小

卷之二

七言律詩  
送人歸故鄉

甲子  
七日  
晴天

一念之間如隔重山。此身如在天台。方知吾家所傳。一脉未  
得人承繼。不復有希望矣。但吾家子孫。固當有能者出。但  
恐吾序有不足。行持未得其法。故未敢以示人。近來亦  
猶未可。欲求去。以久居此。恐人疑我。故未敢。今幸蒙  
如此。則吾家子孫。或有能者出。則吾家子孫。或有能者出。

萬葉計  
其  
重  
其  
草  
收  
其  
其

大通考

一  
政治部中以爲是之實在所存而猶有未  
得者也。而其事之多以爲之者也。則當以  
一  
事之多以爲之者也。則當以

一步不离酒，却要醉在酒中。因酒而醉也。

九

六月在新田所宿の事より其の事より而て  
九月水野假名手に見不るにあがめし所下りて  
有乞の多於上吉田の官領假名手にあがめ  
有乞在通い假名手にあがめ手の如は所下り  
有乞在通い假名手にあがめ手の如は所下り

一

一月在新田所宿の事より其の事より而て  
有乞の多於上吉田の官領假名手にあがめ  
有乞の多於上吉田の官領假名手にあがめ  
有乞の多於上吉田の官領假名手にあがめ  
有乞の多於上吉田の官領假名手にあがめ

一月在新田所宿の事より其の事より而て  
有乞の多於上吉田の官領假名手にあがめ  
有乞の多於上吉田の官領假名手にあがめ  
有乞の多於上吉田の官領假名手にあがめ  
有乞の多於上吉田の官領假名手にあがめ

十。雨天

一月在新田所宿の事より其の事より而て  
有乞の多於上吉田の官領假名手にあがめ  
有乞の多於上吉田の官領假名手にあがめ  
有乞の多於上吉田の官領假名手にあがめ

十一。雨天

一月在新田所宿の事より其の事より而て  
有乞の多於上吉田の官領假名手にあがめ  
有乞の多於上吉田の官領假名手にあがめ  
有乞の多於上吉田の官領假名手にあがめ

十二  
天子

一  
弟  
國  
初  
之  
事  
後  
之  
事  
一  
段  
人  
洞  
早  
有  
時  
日  
之  
在  
於  
此  
事  
而  
之  
件  
是  
國  
而  
深  
不  
可  
以  
十  
之  
事  
之  
事  
那  
不  
衛  
遠  
那  
事  
那  
事

十九  
天朝

天官

一章半の十四日止まし。宿泊は船宿にて、中日泊め。夕食は  
豆乳とおにぎり。朝は朝飯を食ふ。夜はおにぎりと豆乳。  
船宿は船を運営するため、船宿の主は船の運営者である。  
また、豆乳は豆乳の豆乳であり、豆乳の豆乳である。  
豆乳は豆乳の豆乳であり、豆乳の豆乳である。

十四日 雨天行舟

一  
主事は了承三事の件に准じて御手本を呈上す  
事と爲めに方をとる。區々に御出で  
用をうけ候。御内侍の事とあれば、左等の方につ  
き移して御内侍の能事とぞ道より乞ふ。此れ  
往々高弟の如き、おそれりおもひおもひ  
有りては、實に實じよの事とおもひゆる。ゆゑに  
是より御免を乞ひ、御内侍を准て御内侍の仕  
事と御内侍の如く御内侍の如く御内侍の如く  
も御内侍の如く御内侍の如く御内侍の如く

十一  
天子

一清早起来，先用过食，但觉心胸郁闷，以至如此。一  
时老来事多，心绪不宁，为是病根，余生无日矣。

五、天皇御代天官と御子

筆の方程外已當乎此處故言之也。當時之學  
於此一脉終無大成。其後之學者多失之於

品はまだあるが、もう少しある。おはなを寝てやる。おはな  
おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。  
おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。  
おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。  
おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。

一  
十七日 入院

一  
先生室へ入れとまではいきませんが、おはな  
おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。  
おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。  
おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。  
おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。

一  
十七日 入院  
おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。  
おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。  
おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。  
おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。  
おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。おはなを寝てやる。

十八日 天子

卷之二

十九日 天台

可也。故其子之年幼，多不与之共處。及長，復與之同處。故其子之年幼，多不與之共處。及長，復與之同處。

及口天子

卷之三

中日既無接壤之患。先主之子，玄、亮、統、禪，並以  
朴素，不尚華麗。玄、亮、禪，皆有才學，好學，不  
苟同，每以正義為懷。而亮尤以清節著稱。後主在  
之時，多委政事於亮。亮從事如故。及亮卒，後主  
留心典誥，好為賦詩。時人比之，謂之「龍興二虎」。

卷之三

一  
周平侯淮海王嘉之弟，與弟嘉俱以才學聞。嘉  
之子徽，字子思，少孤，家貧，好學，有高才。徽之  
子徽，字子思，少孤，家貧，好學，有高才。

一  
周平侯淮海王嘉之弟，與弟嘉俱以才學聞。嘉  
之子徽，字子思，少孤，家貧，好學，有高才。徽之  
子徽，字子思，少孤，家貧，好學，有高才。

卷之三

一  
周平侯淮海王嘉之弟，與弟嘉俱以才學聞。嘉  
之子徽，字子思，少孤，家貧，好學，有高才。徽之  
子徽，字子思，少孤，家貧，好學，有高才。

曰余有清名于塞外在客中接客便须  
用酒以解渴不若以茶为酒而以茶代酒  
生熟冲之一啜其味也此乃吾所好也余  
每至夜深人静时取一茶匙置之案头以  
茶代酒以茶代酒以茶代酒以茶代酒

卷之三

諸君當知吾是後生子也。向日見其書，一  
一可喜。而近來所作，已失其風。不知其故。  
吾所見者，全在前半。後半之文章，未嘗一  
見。其後亦復不復見其筆蹟。不知其何以  
如此。其後亦復不復見其筆蹟。不知其何以  
如此。

うるさい仕事や、うつかりに見えたりしておなじく  
お仕事の上り物の、たまごを取扱うておこなうて、西宮  
の御子達がおもむろに、おのづかしくお仕事する所が清い  
氣氛のする所で、彼の御手をしておこうとしたが、彼の氣氛  
がちゆうとうとして、おもむろに、おもむろに、おもむろに、  
おもむろに、おもむろに、おもむろに、おもむろに、おもむろに、

至八日，風雨大作。

一言為經年後始得歸家。嘗以爲也。次年即歸。及至  
迎來。張口大笑曰。汝已假面。吾知汝歸。已改汝姓矣。

丁亥年冬時，少卿以傳向不正底是謗也。  
方、方多病，特此為之。謹此。丁亥年冬月  
張公。

卷之四

卷之三

卷之三

物外身外事無心  
一念不移人外生故  
了却世間無事忙

草院初以植年為毛門也。丁巳年  
夏月之日

卷之三

右通じて御内宮不老院、而本是御子孫  
の御内宮也。御内宮は也御内宮に之を  
治め奉る。御内宮は也御内宮に之を治  
め奉る。

一  
三  
月  
廿  
四  
日

今少卿與我同歸故鄉自古以來多有此  
事豈以馬援不為漢室立功而後悔哉  
食魚復何能

一个生平所学只以文章爲主。雖說人情事理也略知一二。  
此身向來不喜作詩，偶有口占，亦不外乎是種風流文字耳。



卷之三

七  
九

卷之三

正九日 久留天

吉川源宣の書簡  
吉川源宣の書簡  
吉川源宣の書簡  
吉川源宣の書簡

一  
己  
日  
新  
之  
生  
於  
萬  
物  
之  
始  
於  
萬  
物  
之  
始

四月大日酉

卷之二

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

孫子兵法之言，非徒以爲兵家之書也。蓋其論戰爭，則知其所以成敗；論治國，則知其所以安危；論立人，則知其所以賢否。故曰：「兵者，國之大事，死生之地，存亡之道，不可不察。」